慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話（3353）1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　武田　純三
毎月　1回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時 午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（3353）1211（大代表）

新年祝賀式開催

新年を祝うとともに慶應医学の発展を祈願

平成27年1月5日、2号館11階大会議室において新年祝賀式が開催された。

清家篤塾長による賀詞

式典の様子

式典では、まず末松誠医学部長から年頭の挨拶があり、続いて、清家篤塾長、藤井清孝北里研究所理事長、武田純三三四会長から祝詞をいただいた。最後に教職員代表として池上直己教授が年頭の挨拶を述べた。

来賓として、学校法人北里研究所から、小林学長、石館常任理事、馬場常任理事、渋谷常任理事、北里家を代表して北里一郎氏にご出席いただいた。

新年祝賀式と併せて行われた「坂口光洋記念慶應義塾医学振興基金」に基づく慶應医学賞医学研究奨励賞授賞式では、宮本健史専任講師（73相当）、久保亮治専任講師（73相当）の2名が授賞した。

式典終了後に行われた懇親会は、竹内勤病院長の乾杯の発声で始まり、三四会役員、医学部、看護医療学部などの教員、関連病院の医師などの参加者たちが新年の挨拶を交わし、親睦を深めた。

※末松医学部長による「教員新年挨拶（全文）」を4面に掲載します。

医学研究奨励賞を受賞した宮本健史専任講師（右）、久保亮治専任講師（左）

西室泰三慶應義塾評議員議長からのメッセージ

～新たな年に新病院棟建設のために一致協力を～

2015年1月19日（月）の教授会において、西室泰三評議員議長が臨席され、新病院棟建設に強い期待を述べられた。

西室評議員議長は、新病院棟建設事業募金委員会に就任されており、この中で委員長自ら医学部教授会を通じて関連の三四会員に対する強力な募金活動へのお願いをされた。

「これまでも新たな病院棟の建設が求められてきましたが、創立150周年記念事業のなかで達成できなかったこの建設について、プロジェクトが立ち上がり、既に進行中であります。1号館のI期工事が、本年7月に竣工を予定しており、三四会全体で募金活動を活性化するために是非教授会にご協力をいただきたい」とメッセージを伝えられた。そして、慶應義塾大学病院の建設は、塾員のみならず、日本全体にとっても重要であり、しかも先端的な医療を進めていくために不可欠である、とのお考えを示され、この点を信濃町での活動のコアとなる教授の皆様にご協力をお願いしたいと述べられた。

次いで、戸山常任理事が募金戦略会議の議長として事業計画とそれにかかる資金計画、現状の募金状況と目標について説明された。

同時に臨席された、比企能樹連合三田会長（前三四会長）および武田純三三四会長からもお願いとご挨拶をいただいた。

メッセージを述べられる西室泰三評議員議長

新病院棟1期棟建設：今月の進捗状況

新病院棟のデザインコンセプト「Keio Forest」

新病院棟開設準備室では設計施工を担当する竹中工務店などと協議を重ね、病院経営ボードや医学部教授会を経て新病院棟のデザインコンセプトを「Keio Forest」としました。この先の内装などのデザイン計画を進めるにあたってForest（杜：もり）をイメージしていきます。

信濃町キャンパスは神宮外苑や赤坂御用地から新宿御苑などへとつながる緑豊かな地域に位置しています。都心にあってこの恵まれた周辺環境を生かし、病院全体を杜（Keio Forest）とすることをコンセプトとしました。この「杜」には人々の営みにより培われた伝統と、人の手が加えられ優しく迎えてくれる自然という意味がこめられています。

患者さんが駅に降りてから診察を受けるまでを、心地よい森の中へいざなうように、一つのストーリーに沿って空間に変化をつけながら、安心な診療を受けられるように導いていきます。

まず患者さんはキャンパス内の緑豊かな街路を通り建物に入ります。次にキャンパスの中央を貫き、参道のように格調高く歴史を感じさせるメディカルストリートが出迎えてくれます。メディカルストリートを進み1号館に入ると、木漏れ日が差す広場のような開けた空間が現れ、人々が憩えるスペースとなります。それと直角に交わるホスピタルモールは外来のメイン動線で、木質のヒューマンスケールなインテリア空間となっており、そこから中待合いに入ると、木の葉や花などをイメージできる小さなスケールの空間となり、患者さんに安心感を与えます。

インテリアは自然な素材感が感じられる材料を中心に、アースカラーでまとめ落ち着きと安らぎを与える空間を創りだしていきます。照明も木々の間から差す木漏れ日のように柔らかく、自然な陰影を感じられるものとしています。

建築、インテリア、サイン、照明などが一つになってそれぞれのエリアが持つ空間を杜のようなイメージで表現し、分かりやすく居心地の良い空間にすることを目指します。

（新病院棟開設準備室長　渡辺真純　64回）

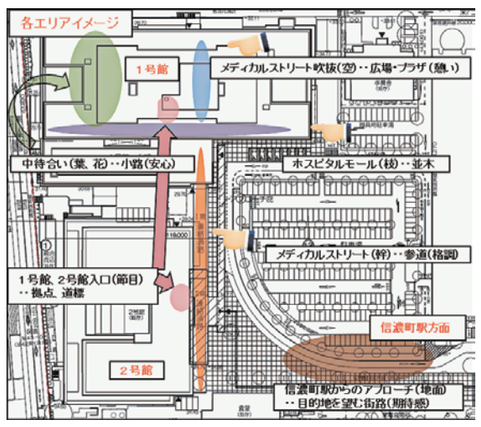


図1　キャンパス内、各エリアのイメージ

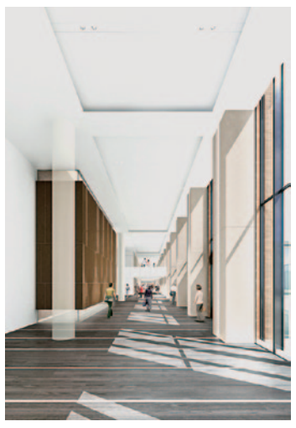


図2　慶應義塾らしい伝統と格調を感じさせるメディカルストリート

図3　開放感のあるメディカルストリートの吹抜け

図4　患者さんに安心感を与えるホスピタルモールと中待合い

募金の声

新病院に光を

村山病院院長　村山　行信（31回）

私には10才年上の兄がいましたが（20回生外科）昭和19年にテニアン島で戦死しました。昭和20年8月15日の終戦により、私の在学していた陸軍経理学校は廃校となり、同年11月に慶應義塾大学医学部予科に転入学させて頂きました。兄は陸上競技やサッカーをしていましたので、信濃町の焼失前の病院も訪れたはずですが、黒っぽい2階建の建物だったような漠然とした記憶しかありません。私自身予科は登戸や三鷹の仮校舎を転々とし、学部に入りやっと信濃町にもどり、予研の一隅で授業を受けました。その中、新宿紀ノ国屋と同じようなイメージを持った木造2階建の病棟が完成し、その一角に講堂も作られました。ブルーのラインが入って、それなりにすっきりした良い建物でした。薬理学の阿部勝馬教授等が主導されて「王」字型の本格的な病棟建設が始まり、寄付金により最初に完成したのが7病棟（特別病棟）だったように記憶しています。昭和36年に医局を去り、父の経営する志木の病院に勤めることとなりました。時折用事があって信濃町にはきましたが、中央棟で雨漏れする等、余り良い評価は聞きませんでした。

ここ10年位前より、埼玉西南部連合三田会の会長に推され、慶應義塾創立150周年記念事業として、170億円の募金運動に携わってきました。今又医学部の100億円の募金が行われています。相継いでの募金は、正直言って私のような超高齢者には大きな負担となります。年金で暮らしていらっしゃる方もあり。多くは預金を切りくずして対応することとなりましょう。一遍にということは無理だとしても、少しずつでも協力していきたいという気持は持っています。

次に私の新棟に対する希望を述べたいと思います。

一、病院はアカデミックな雰囲気を持つことは望ましいけれど、官僚的であってはならないと思います。

一、病院は安全性を第一として、効率性を求めるのは二の次と考えて運用して頂きたいと思います。

一、インフォメーションは大切な部位です。分り易い場所で、分り易く（他国語との対応を含めて）説明してもらいたいと思います。初めて大きな病院を訪れる方にとって、先ず評価が分かれる部位だと思います。

一、病院のインテリアやエクステリアは雰囲気を左右しますので、第三者の意見を聞かれたらいかがでしょうか。幸い塾長御自身建築家の家系であり、塾関係で優れた意見をお持ちの方も居られましょう。この分野での投資は決して無駄ではないと思うのです。

患者さんにとって世界一〇〇な新病棟

一般社団法人北埼玉医師会会長　加藤　誠（56回）

歳を重ねたせいか、最近妙に「母校」ということばに哀愁を感じる、母校だけでなく〝母〟の付いたことば、母親、母国、母なる大河、には共通した〝いとおしさ〟がある。今回の募金は母校への想いがなければ成立しない。

今までの私の人生の中で一番感激をした瞬間は塾医学部に合格した時であった。一番熱中した時期はスキー部時代であった。試験のあるのも忘れて雪山の中を走り回っていた。某講師の先生から「加藤君、試験には出てきて、名前だけでも書きなさい」と叱咤されたことが浮かぶ。一番大変だった時期は専修医として診療にあたった宇都宮済生会病院時代であった。三日三晩患者さんにつきっきりで病院に寝泊まりしたことも度々あった。このように私の人生にとっての一番の付く思い出は、殆どが母校と関係している。今でも私の血の中には母校への熱い想いが脈々と流れている。

私は既に母校への想いを込めて募金を行った。塾員の母校への想いには温度差はあるだろうが、少なくとも幾ばくかの熱い想いはあるはずだと思う。しかし募金とはお金が係わる行為である。母校よりも御身（おんみ）が一番。募金の額は気持ちで十分でありそれが当然であろう。母校への想いが怒涛のように寄せられれば、それは必ずやわれわれ塾員に力を与えてくれるはずである。

社中の募金の力で「患者さんにとって世界一〇〇な新病棟」が実現することを望んでいる。〇〇は「安心、安全」、「優しい」、「高度」などが浮かぶ。病院執行部には多数の俊才が揃っている。〇〇は公表しなくてもよいが、コンセプトとして新病棟設立検討委員会（正式名は承知していないが）で掲げて頂き、病棟設計、運営にあたって欲しい。

素敵な新病棟を世に示さんことを、強く望んでやまない。

続新病院棟建設の実践的寄付考

三四会横浜支部長　八十島　唯一（37回）

慶應医学創設100年記念新病院棟建設寄付金募集が、平成13年10月の三四会募金委員会キックオフミーティングを皮切りに本格的にスタートした。その後三四会は会長を陣頭に総力を挙げて精力的に広報活動に進めてきた結果、徐々に三四会会員が知るところとなり、静かに　ゆっくりと　成果が上がりつつあるようだが、間もなくターニングポイントを迎えようとしているにしてはいささか勢いが弱い。これからが正念場になる　と今迄も繰り返し言われてきた。

さて私は寄付金に対して今まであまり積極的ではなかったが、比企前会長から募金委員会学年幹事を頼まれ一念奮発、積極的に協力することに改心！し今日に至っている次第。

先ず考えたことは当時募金期間がまだ5年あったので個人の寄付額の50％が税額控除される事から寄付金額別、分割回数別、税額控除後の実質負担額一覧表を作成し、たとえば寄付額100万円を60回分割納付する場合月額1万円の実質負担となることが一目で分かり、月1回の外食控除！でまかなえる事になり、大方の賛同が得られると簡単に考えたが考えが甘かった。

年金生活者はそれも厳しいとの反応にいたく共感してしまったり、大方の反響も鈍く不調。次いで医学部新聞論壇に「新病院棟建設に関する実践的寄付考」なる拙文を寄稿、次なる手は自信作！「これなら出来る寄付協力」なるミニ講演（要旨：分割納付簡易一覧寄付額に対する税額控除は個人50％法人100％　税額控除には確定申告が必須でe―Taxの申告が簡単）を三四会評議員会で行ったが、その後他所でプレゼンの機会も無くこれも不調。横浜三四会ホームページでも広報しているが閲覧された方ありますか。

そこで簡易な申込み手段の考案や、頻回な広報活動をと提案し、三四会向けの明快簡便な「個人用寄付金申込書（仮）兼法人用書類請求書」（A4版1枚）が作成され、医学部新聞に挟み込み郵送したり、医学部長が各支部会で「寄付お願い」の際配布されたりして効果がじわじわ出始めているようだ。（問合せ先医学部新病院棟開設準備室03-5363-3430）

募金委員会の一員になって1年半経つが呼びかけの難しさを実感している。山中で叫べばエコーが返ってくるが、反応が聞こえない見えない分からない天に向かって叫んいるようだ、でも何かしなければと思う毎日だ。

末岡募金担当理事の募金委員会では新しい切り口の募金方法を考えておられるようであり成果が期待される。寄付するつもりだったがそう言えばまだだったとか、簡単にできるとわかっていれば寄付したのにと思っている方々も多いと思う。

若い三四会会員も含め一人でも多くの会員の協力をお願いするや切である。やりましょう、やってください新病院棟寄付協力。

いつやろう　今でしょ！

募金のおすすめ

花谷クリニック　花谷　勇治（54回）

私は昭和50年に卒業し、外科学教室に入局し、消化器外科を専攻しました。6年間の研修医時代を経て、川崎市立川崎病院に5年間、帝京大学に16年間、外科医として勤務した後、目黒で胃腸科を開業しています。

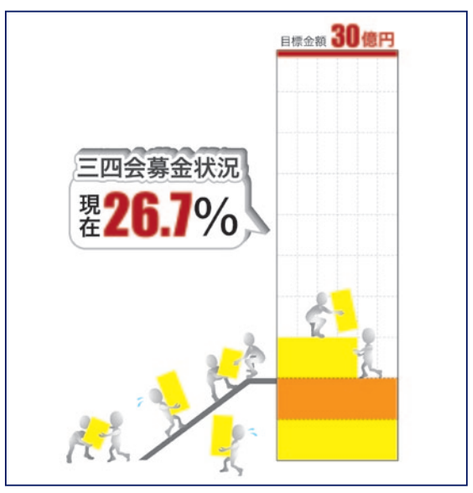
フレッシュマンとして1年間、慶應義塾大学病院で外科と麻酔科をローテーションしました。2年間の関連病院への出張で、手術手技と術後管理を学んだあと、再び慶應義塾大学病院に戻り、レジデントとして3年間を過ごしました。あらためて思い起こすと、信濃町で過ごした期間は意外に短かったことに驚かされます。しかし、その短い期間に、外科医としての知識と技術、そして学習方法を叩き込まれました。おかげで、以後20年以上にわたり、無事に外科医を全うすることができました。また、開業して以降も慶應の出身ということで「肩身の広い」思いをさせていただいております。心から感謝しています。

早いもので、卒業してから40年が経とうとしています。私も今年で65歳となり、「高齢者」の仲間入りをすることになります。これまで大きな病気もせず、事故や災害にも遭わず、無事に過ごして来たことを感謝しています。しかし、この生活がいつまでも続くとは思われません。突然、心筋梗塞や脳梗塞に襲われるかも知れません。進行した癌を患うかも知れません。生命には関わらないとしても、認知症を発症するかも知れません。残された時間を大切にするとともに、思い残すことが一つでも少なくなるよう、そろそろ死ぬ準備を始めなければいけないと思っています。

おかげさまで、開業して経済的に少し余裕ができました。同輩や後輩が学会や研究会を開催すると知らされれば、積極的に寄付をさせて貰っています。日本赤十字社やユニセフ協会にも、僅かずつですが、寄付を欠かさぬよう心掛けています。貯えは減りますが、その分、心が豊かになります。このたび、新病院棟建設資金に募金させていただきました。

医学部創立100数年に向け、多くの仲間が頑張っています。きっと、卒業生が誇れるような立派な新病院棟ができることでしょう。一介の開業医としては、この事業に直接関わることはできませんが、寄付という形で協力できたことを嬉しく思っています。これまでに、募金を済ませておられない会員各位におかれましては、母校のためだけでなく、ご自身のためにも、ぜひ募金をされますよう、おすすめします。

最後になりましたが、三四会会員の皆様のご健勝と、ますますのご発展をお祈り申し上げます。



鑑定知来

NIPT（非侵襲的胎児診断法）という、母体血液を採取するだけで解析可能となった新しい胎児染色体検査法が、慶應義塾大学病院産科においても臨床研究として導入されてきています。日本医学会の認定を受けた48施設のみが施行可能な検査であり、倫理的な側面から新聞紙上で大きく取り上げられていたことも覚えていらっしゃる三四会員の方も多くいらっしゃると思います。

従来の胎児染色体検査は、羊水、胎盤、臍帯血等の胎児成分をとりだして検査する方法でしたが、このような胎児成分を採取するためには、羊水穿刺、絨毛採取、胎児採血などの侵襲的な検査方法をとる必要があり、検査自身によって流産となってしまうリスクがありました。ところが、近年、母体血液中に存在する胎児（胎盤）由来のDNA断片を用いて、次世代シークエンサーを用いて高速、多量のDNA情報解析を行う、NIPTという胎児の染色体検査が可能になってきました。妊娠9週以降の母親の血液で胎児の染色体、21番、18番、13番、X、Y染色体の数的異常が検査可能であるとされています。さらに、日進月歩のDNA解析技術の向上により、検査会社によっては、22q11欠失症候群のような微小染色体異常についても出生前診断可能である事がうたわれる時代となってきました。

簡単な血液検査で胎児異常の診断が出来る時代になってきた一方、検査の施行に当たっては十分なカウンセリングが要求され、臨床の現場では大変苦労しております。しかしながら、本来、NIPTに自主的に興味を持った夫婦だけでは無く、全ての夫婦に子供の病気・将来についての十分なカウンセリングを行う必要があると思われます。そのためにはどうしたら良いか、その仕組み作りはどうするかと言うことを、日本の将来のためにも皆様一人一人が少しだけ考えていただけると幸いです。

（産婦人科（産科）　田中　守　65回）